

令和 7 年度

研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会 教育推進課
育ち支援課

第422集 中村 数理

「自己選択学習」による国語科の物語の授業づくり
—互いに解釈を深められる子どもを目指して—



第423集 田中 寿子 山田 芽衣 島田 裕子 関本 芙実香

不登校対策の一助となる発達支持的生徒指導についての一考察
—「スリンプル・プログラム」の導入により見られる不登校傾向の生徒の変容—



【研究報告 第422集】 概要版

「自己選択学習」による国語科の物語の授業づくり
— 互いに解釈を深められる子どもを目指して —

四日市市教育委員会教育推進課 研修員 中村数理

1 研究の目的

自己選択学習を学習形態とした物語の授業を行うことで、子どもがより学習を調整するようになり、解釈が深まることを明らかにする。

・解釈とは何か知りたい! ⇒p13~
・自己選択学習と解釈の深まりの関連が知りたい! ⇒p15~

2 研究の内容と方法

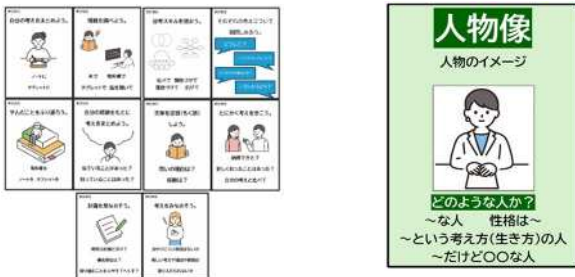
(1) 自己選択学習とは(p2~)

自己選択学習とは、全ての教科などにおいて、子どもが自ら課題をもち、計画し、自らのペースで、課題の解決に向けて、情報、手段等を選択・判断し、探究的に学び続けられる授業のことである。自己選択学習では、教科の授業において、子どもに、どのような選択を委ねるかを焦点とし、授業づくりをする。授業者は、子どもたちが、興味を持ち、自律して学べるよう、環境構成や支援をしていく。

・他の学習形態との違いが知りたい! ⇒p3~
・自己選択学習と自己調整学習との関連が知りたい! ⇒p10~

(2) 検証授業と検証方法について(p16~)

9月・11月の2回、「自己選択学習」による物語の検証授業を行った。学習材は、それぞれ「注文の多い料理店」と「大造じいさんとがん」とした。6月には、学習の調整を促す「サイクルシート」、学習方略や読解方略を示した「学び方カード」「読み方カード」等を使って、事前指導を行った。



10の学び方カードと読み方カードの一部(本文P17より抜粋)

検証は、学習の調整については、「メタ認知的活動尺度」と「国語科の物語の学習について」の質問紙、解釈の深まりについては、「解釈の深まりテスト」を用いて、実践前後の結果を比較することで行った。また、検証授業の記録から、筆者がエピソードを記述し、分析を行った。

・検証授業の手立ての詳細が知りたい! ⇒p17~
・単元の展開や指導の実際が知りたい! ⇒9月p25~ 11月p37~

3 研究のまとめ

(1) 結果(p67~)

9月・11月の検証授業の実践前後を比較して、質問紙におけるメタ認知に関わる項目、学習方略に関する項目、動機づけに関する項目の評定平均値は、いずれも上昇した。また、「解釈の深まりのテスト」では、評価が上昇した子どもの数が増加し、多様な読み方で解釈する子どもが増えた。このことから、本研究における「自己選択学習」による検証授業は、子どもの学習の調整を促すことが示唆された。

・結果と考察の詳細が知りたい! ⇒p71~

(2) 自己選択学習で大切にしたいこと(p73~)

「自己選択学習」を実践し、「子どもたちの『したい』という思い」を尊重することである。そのために、教師は、子どもの「したい」という思いが生まれたときに、「ヒト(一人・相手)」「モノ(場所・道具)」「コト(問い・時間配分)」等の環境を整えて、実現できるようにすることが重要である。「自己選択学習」では、これまで、指示や説明に割いていた授業者のリソースを、個に応じた指導に充てることができる。効果的に指導を行うためには、「子どもを見る目」と「教科の本質の理解」が重要である。個に応じた指導をする際は、子どもにとって、目の前の問いや環境、直面している困難さ等が、どう「見えているか」を理解する目が必要となる。また、その理解を深めるためには、教科の本質という見方・考え方で、子どもを見ることも必要になる。

検証授業を終え、学びを委ねていくことを実現していくために大切なことは、教師が、子どもたちは自ら学んでいく存在であることを信じ切ることであると気がついた。子どもたちは、学ぶ過程で、選択を失敗することがある。その失敗の機会を先回りして、奪うのではなく、子どもにとって価値のあるものだと、見方を変えることで、教師の授業におけるありようが変わるだろう。

このように、子どもが自ら学んでいく存在だと、信じ切れたとき、子どもが「したい」という思いを実現しながら、教科の本質に迫ることができる授業づくりに近づくだろう。

・時間はないけど、もう少し詳しく論文の内容を知りたい!
①目的 p16~ ②方法 p17~ ③結果・考察 p71~
(所要時間:約20分)

1 研究の目的

SST（ソーシャルスキルトレーニング）やSGE（構成的グループエンカウンター）の技法が活用されたスリンプル・プログラムを実践することにより、不登校傾向にある生徒の欠席の増加や長期化を防ぐことにつながるのかを検証する。

2 研究の内容と方法

(1) 研究対象

スリンプル・プログラムを令和6年度から学校全体で実践している市内の中学校1校

(2) 研究の内容

- ・不登校傾向の生徒の抽出：不登校傾向の生徒を抽出し、Q-U検査結果の推移を分析する。また、事例生徒の観察や学級担任へのインタビューを実施する。
- ・Q-U検査のデータ分析：令和3年度入学生から令和7年度入学生までの5学年分の全校生徒のQ-U検査を分析する。
- ・アンケート調査：令和7年度の全校生徒・教員を対象としてアンケートを実施する。

(3) 検証の方法

市内で使用されている「児童生徒の問題行動・不登校に関する実態報告 長期欠席および不登校リスク群」の資料をもとに、以下の条件で不登校傾向の生徒を抽出した。

- ・令和3年度入学生から令和7年度入学生までの5学年分。
- ・各年度の1学期末時点または2学期末時点で、不登校リスク群のうちの「欠席10日以上30日未満」となっている。
- ・各年度のQ-U検査の1回目と2回目の両方を受けている。

抽出された生徒について、年度ごとのQ-U検査結果の推移を分析するとともに、事例生徒の質的分析を行った。

令和3年度入学生から令和7年度入学生までの5学年分の全校生徒のQ-U検査のデータを分析した。分析に用いるデータは、各年度の1回目と2回目の両方のQ-U検査に回答しているもののみとした。スリンプル・プログラムの経験年数の違いが、4つの群「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」にどのように表れるのか

を検証した。

生徒や教員がプログラムの効果をどのように感じているのか、また、プログラムが生徒の自尊感情やソーシャルスキルにどのような影響を及ぼすのかを把握するために、令和7年度の全校生徒・教員を対象として、7月と11月にアンケートを実施した。

(4) 結果

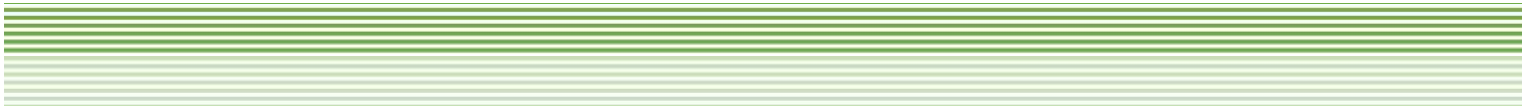
不登校傾向にある生徒が、スリンプル・プログラムの実践により、その状態を長期化させず、年度末まで不登校に至らずにとどまる割合が高くなったことが示された。また、抽出された不登校傾向の生徒のQ-U検査結果の推移の分析からは、特に承認得点が増加する傾向が認められ、プログラムの経験年数が長いほどその増加の幅が大きいことが確認された。さらに、楽しみながらプログラムに取り組む過程を通して、生徒の自尊感情やソーシャルスキルに対する自己評価が向上し、学級内での安心感の形成に寄与する可能性が示された。

3 研究のまとめ

本研究では、令和6年度からスリンプル・プログラムを実践し始めた中学校1校を対象校とした。対象数が限定的である上、取り組み始めて2年目までの状況を検証するにとどまった。また、本研究では同一年度内で比較対象となる対照群を設定していないため、確認された変化がスリンプル・プログラムの実践のみによるものであると断定することはできなかった。ただし、複数年度にわたるデータの比較から、一定の傾向が認められた点には意義があると考えられる。

スリンプル・プログラムのように子ども同士が関わり合う力を育てる活動を学校全体で実践していくことは、生徒指導提要に示された「不登校対策につながる発達支持的生徒指導」の理念と一致しており、不登校の予防的な支援となるものである。全ての子どもたちにとって学校・学級が安全・安心な居場所となるための一助として、継続してそのような活動に取り組んでいく必要がある。

そのような活動の効果を安定的に発揮するためには、教員間で、活動の意図や進め方についての共通理解を深めていくことが必要であると考えられる。



令和7年度研究調査報告【概要版】

発行 令和8年3月

発行者 四日市市教育委員会教育推進課

〒510-8601 三重県四日市市諏訪町1番5号

電話番号 / 059-354-8255 FAX / 059-354-8475

E-mail / kyouikusuishin@city.yokkaichi.mie.jp

